

## 生態学事典

巖佐 庸・松本忠夫・菊沢喜八郎・日本生態学会 編集

共立出版 2003年6月刊

A5版 708頁 13,000円(定価本体)

分子レベルでの生命現象の解明が今日大変な勢いで進められ、研究の成果が注目を集めている。一方では、対象とするレベルから見ると対極にあるともいえる「個体もしくはそれ以上のレベルでの生命現象に関心をよせる生物学」あるいは「生物の生活に関する科学」である生態学も、環境の悪化などの問題がますます顕在化しつつある中で、急速な発展が期待されている。

生態学に関わる事柄にはわれわれの生活に直接密接に関わってくるものが多く、それだけに一般市民の関心も高い。化学物質の生物濃縮の問題、これまで人間とは関係をもたなかった病原体による深刻な病気の発生は、人間が地球における生態系の一員であることを強烈なインパクトをもって我々に示した。他の生物との共存、環境保全の意義は今や一般市民に広く理解され、その対策は生活の中でも実施されている。直接の対象が生態学とは異なる分野における研究、あるいは事業においても、フィールドが対象となるときには生態学を考慮することなしには実施できないものも多い。本会会員諸氏の中には生態学とも関連をもって研究を行なっている人も多いことと思う。

本事典は日本生態学会の50周年を記念して出版されたものであり、上述のような現在の社会や科学・技術の状況を踏まえ、「生態学を学ぼうとする学生や教師だけでなく、幅広い関連分野の研究者や学生、環境問題や野外の生物に関心をもち市民が生態学の教科書や文献を読んだり研究を進めたりする時の助けになることを念頭において」(本書序文)編集されている。

現在多くの分野でいろいろな事典が出版され、特徴もさまざまであるが、大別すれば、すべての項目を50音順

に並べて説明を加えているタイプと項目を内容から体系的に編集して説明しているタイプとになる。評者の経験に基づけば、前者のタイプでは、一般に、項目は多く取り上げられてはいるが、関連の内容の記述を欠くため、直接の専門としない他の分野の人にとっては、項目の定義はわかっても関連する項目を総合して理解することが容易ではない場合が多い。後者のタイプでは、項目や用語の検索に不便を感じることもある。本書はこのようにそれぞれのタイプの事典にありがちな欠点を克服している。本書では項目は50音順で並べられているが、取り上げられている項目が絞られ、各項目はある程度まとまった長さで丁寧に解説され(各項目の説明には平均約1,500字があてられている)、関連する小項目、用語はその中で説明されている。これによって、内容の総合的理解が容易となっている。さらに、必要に応じて関連の文献も示されている。そのため、項目が50音順に並べられているとはいえ、各項目の説明には内容に基づいて体系的に編集された事典の趣がある。巻頭には階層的目次も掲載されているので、生態学のそれぞれの分野を本書で体系的に学ぶことも可能である。項目が絞られたことによる検索の不便さは、索引を充実させることによって十分に解消されている。小項目、用語は和文、欧文の両方の索引で検索でき、さらに生物名、人名も検索できる。その結果、本書の編集の意図は十分に達成され、対象とした多方面の読者にとっても使い勝手が良く理解しやすい格好の事典となっている。

平沢 正(東京農工大学)

受稿年月日: 2003年12月25日

受理年月日: 2003年12月25日